

シリーズ「国土教育」 内村鑑三に学ぶ「寛容な民主主義とインフラ整備」の重要性

シリーズ「国土教育」

後世への最大遺物 デンマーク国の話

内村鑑三著



普通の人間にとって実践可能な人生の真の生き方とは何か。我々は後世に何を遺してゆけるのか。明治27年夏期学校における講演「後世への最大遺物」は、人生最大のこの根本問題について熟っぽく語りかける。『我々は何をこの世に遺して逝こうか。金か、事業か、思想か。……何人にも遺し得る最大遺物——それは勇ましい高尚なる生涯である。』(解説=鈴木龍久)



欧州統合は1992年、当

危うくなっている。一方、アメリカ合衆国は世時的EC加盟12カ国によって界有数の多民族国家で多様な約によって成熟し93年、EUが発足。同条約には域内の社会的、経済的結束と国際競争力強化を図る「欧州横断運輸ネットワーク(Trans-European Transport Network:TEN-T)の構築」も盛り込まれ、欧州の国際輸送インフラ構築が進められた。

97年のアムステルダム条約で、協定参加国間の国境検査の撤廃を規定した「シェンゲン協定」をEUの法として取り入れ、99年に経済通貨同盟が発足し単一通貨ユーロが誕生、2004年に中東欧諸国のEU加盟が実現し、順調に発展するかに見えた。

しかし、リーマンショック後の世界同時不況と欧州債務危機を経てEUは、デフレや経済の長期停滞が懸念され、ドイツを除く多くのユーロ加盟国は、南欧諸国を中心に高い失業率に苦しむ。更に中東からの大量の難民流入と連続テロの発生でEUそのものが

大なるわざわいは米国の排日である。しかも前者を嘆く者は多くして後者を憂う者は少ない。地震は財産を壊しにすぎずといえども排日法は権利を奪った。このままにして放棄し置けば日本は国として滅ぶるのである。そのことを思うて憂慮にたえない」排日法(排日移民法)は24年7月施行されたアメリカの法律の日本における通称。日本人移民のみを排除した法律ではなく、1890年以後に大規模移民が始まった東欧・南欧出身者、アジア出身者を厳しく制限するのが目的。特にアジア出身者には全面的に移民を禁止する条項が設けられ、当時の日本政府・国民はこれに強く反発。イエス・キリストと日本を愛する内村の落胆は大きかった。

後世への最大遺物

内村は国土教育・インフラ教育の教材に相応しい著書を幾つか遺した。『後世への最大遺物』と『デンマーク国の話』はその代表作。『後世への最大遺物』は明治27年夏、箱根で開かれた全国キリスト信徒の修養会での講演をまとめたもので、要旨は次の通り。

われわれが五十年の生命を托したこの美しい地球、この美しい国、このわれわれを育ててくれた山や

将来世代に遺すインフラ

河、われわれはこれに何も遺さずに死んでしまいたくない。何かこの世に記念物を遺して逝きたい。それならばわれわれは何をこの世に遺して逝こうか。金か事業か思想か。これいづれも遺すに価値あるものである。しかしこれは何人にも遺すことのできるものではない。これは本当の最大の遺物ではない。何人にも遺すことのできる本当の最大遺物は何であるか。それは勇ましい高尚なる生涯である。

勇ましい高尚なる生涯、金、思想と合わせ、将来世代に遺すべき価値あるものとして(公共)事業、つまりインフラ整備を挙げている。この時内村は、価値ある土木事業として箱根疎水(箱根の山の下に隧道を掘り、芦ノ湖の水を沼津方面に流し、耕地を大きく増やす)と安治川開削(淀川の洪水を防ぐため大阪天保山を切り開き、安治川を造つた)を取り上げた。

デンマーク国の話

『デンマーク国の話』はドイツ、オーストリアとの戦争に敗れシュレスウィヒとホルスタイン2州を奪われたデンマークの復興を願う工兵士官ダルガスが、外に失った国土を内に求めようと、荒漠の地ユトランドに植林する苦心を描いたノンフィクション。ユトランドの荒野には樫の木が繁り木材が収穫できるようになったほか、気候が大きく変化して良き田園になった。

この伝記物語は「デンマークの柱」として戦後の小学校国語教科書にも採録。ちなみに「2013年版世界幸福度

報告」は、デンマークを世界で一番幸福な国としている。ではありませぬ。はたまた金ではありませぬ。銀ではありませぬ、信仰であります」と3つの教訓を示した。

内村の熱い想いを引き継ぎ、現代に生きる私たちも国土に対して働きかけを続け、将来世代により良い社会基盤を遺していかなければなるまい。 (国土学アナリスト 森田康夫)

編集部から…この原稿は熊本地震発生前の4月6日に寄稿いただいたものです。

設され、それは集客と売り上げの大きな割合を占めるようになっていきます。ところが、その多くは地域外からの来訪者をターゲットとした「地産来消」に依存し、土産物ビジネスの感覚に似た品揃えと値付けになっているものです。たどえ賑わいがあっても、その覆う雰囲気は地元の人が集う場とは異なるものがあります。 そのような中で、近年では地産地消型の道の駅が注目されています。地元ナンバーの車両が列をなし、地域外からの観光客にとっても、地元の人が認めるものであることを保証することを、肌で感じ取ることで売上増につながる好循環を生み出しているのです。 永く頼られるは他力ではなく、地元の人々がリピーターとなり、自然と集うような場であることが道の駅の理想の姿。地元の人が集ってこそ道の駅の「駅」たる所以となるでしょう。

点描

道の駅

松波成行 かつて福岡に在住していた頃、週末ともなれば、ある産直市場に買い出しに出かけていたことがあります。旬な食材の品揃え、生産者の顔を見せる仕掛けは当たり前で、何よりも値段以上に見合った地元の食材が、まとめて手に入れることが魅力の一つでした。数多くある産直市場の中でも、その産直市場ほど地元の人々がこぞって集まる場所を、他に見たことがありません。「地産地消」という言葉が使われ始めて久しいですが、まさにその地産地消の姿を実感したものです。 道の駅にも今では当然のように産直市場は併